

本書は、2011年に二通氏が同じ全障研出版部から刊行した『映画で学ぶ特別支援教育』のいわば姉妹編で、主に「総合リハビリテーション」（医学書院）や「みんなのねがい」（全障研出版部）に連載された論考に基づいて編集・再構成されている。

本書は、「映画は、どんな時代を生きているのかについて知るためのテキスト」と考えて、「映画で障害者問題の解決の行方を考察する営み」を続けてこられた二通氏の中間発表的な決算として、位置づける書物である。特に、2007年の特殊教育から特別支援教育の移行に伴って、LDやADHD、高機能自閉症などの発達障害に対する関心が高まっているが、そうした時代のニーズを反映してか、本書では発達障害的な問題に関わる映画が数多く論じられている。具体的には、『サウンド・オブ・ミュージック』のマリアや『ノーウェアボーイ』のジュリア、『男はつらいよ』の寅さんや『シンプル・シモン』のシモンなどで、これらの人物に対する「二通流」の解釈には、氏の豊富な教員体験で培われた障害を抱えながら生きる者への暖かい眼差しを感じることができる。

とりわけ興味深いのは、ビートルズに関わる部分である。『ノーウェアボーイ』に描かれたジョン・レノンの実母ジュリアにADHD的な特性を見る二通氏は、母ジュリアは息子ジョンを二度見捨てたとしながらも、「ジュリアがジョンに与えたトラウマが、ジョンの芸術表現のパワーになった」と、その肯定

的な影響を指摘する。そして、同じビートルズのメンバーであるポール・マッカートニーも母を亡くした少年であったことに注目する二通氏は、「母親不在の境遇が偉人を創った」と語るのだが、ここには、ビートルズとその作品を論じるうえで見逃すことのできない視点が含まれている。

筆者は以前、近代日本文学を作り上げた205名の作家や文学者の年譜を検討して、その約4割は数え年で20歳になるまでに父親もしくは母親との離別を体験しているという結果から、幼少期における両親との離別は、拭いきれない喪失体験や外傷体験となりうる一方で、創造的な飛躍の要因たりうる可能性もあると指摘したが（『精神分析と人間存在分析』第22号、2014）、二通氏は、ジョン・レノンとポール・マッカートニーというビートルズの二大巨頭にも同様の現象を見ているのである。

本書の「はじめに」の部分で二通氏は、映画がもたらす効果として、①映画で特別支援教育の精神を養うことができる、②映画で特別支援教育の基礎的知識習得の扉を開けることができる、の2点を挙げている。しかしながら本書は、映画を特別支援教育に役立てようとする人のみならず、ビートルズや寅さんの魅力の秘密を究明したいと考えているファンにも、必見の内容になっていると思われるのである。（A5判、頁135 2015年 定価1,700円＋税[ISBN978-4-88134-415-6] 全国障害者問題研究会出版部）